



虚構の中に描かれる真実

— 石田衣良『夕日へ続く道』を読む —

広島文化学園大学看護学部

深川 賢 郎

■ はじめに

文学作品は本来、虚構（フィクション）である。読者は、虚構のなかに込められている真実を読み取る。そのとき、読者のなかにある価値観や興味・関心、あるいは知識が反映されるため、受け止め方は読者によって多様である。読み手のなかに形成される作品像は、元の著者の意図とは微妙に違った内容になっていることが考えられる。

作品の解釈における読者の発想の飛躍が、作品の内容を豊かに膨らませる。読者は、作品に託されている著者の企図を読み取りつつ、自分の描く世界を創り上げていく。多様な読み取り方を許容する作品は、それだけ奥行きが深い作品ということになる。

このように考えると、作品を鑑賞することは、読者の積極的な創造活動を誘発し、読者の持っている要素を作品に組み込む道を生み出すことになる。文学作品は、著者の生み出す虚構によって形を成し、読者の創造する虚構によって定まる。

■ 「読み」に働く創造活動

画家、安野光雅はある書物¹⁾の対談の中で司馬遼太郎のことばを紹介している。「絵に描いてあるりんごの方が、実物よりいい」ということばである。これをうけて、対談の相手である彫刻家の佐藤忠良は次のように述べている。「りんごを描くときは、その作家の全内容が投影される。作者のあらゆる哲学的なものや思想的なものなどが投影できれば、絵のりんごは実際のりんごより良く見える」（注1・p25）人の顔を彫像にするとき、作家として力を入れるのは、「その人の過去と現在と将来はどんな顔になるかなど、動かない粘土に語らせるということです。それだけ欲張った仕事をしている」（注1・p.70）。

彫刻家は、作ろうとしている対象の表面の姿を見ているのではなく、本質を掴もうとしている。佐藤忠良は、対象の中にある本質を「えぐり出す」と表現している。

このことは、彫刻家の中に、対象の生み出す虚構を創作することを意味している。虚構でありながら、そのイメージには人物としてその人の変化をもたらす時間まで刻み込もうとしている。ここに芸術家の苦しみがある。芸術を支える前提として作家の眼による鋭い闘い（読み）がある。

この書物で、対談している安野光雅は創作の経緯を次のように述べている。

風景を描くとき、「僕はあんまり考えない。たとえば楽譜を見て演奏しているような感じ。風景という楽譜があって、それを演奏する。そういうのに近い。ですから、対象とそっくりにはならないかもしれないけれど、音楽として出来上がっていく。……風景を集中してじっと見つめていると、遠くの木々がざわめいているのがわかる、などということがよくあります。これは、こちらの熱意に木々が応えてくれるというのではなくて、全神経を集中すると見えてくる。聞こえてくるものであるということなんで

ふかがわ けんろう

〒737-0004 広島県呉市阿賀南2-10-3 広島文化学園大学看護学部

しょうね」(注1・p64)

遠方にある森や林の木々が「ざわめいているのがわかる」という。聞こえるはずのないところにある風景が音を立てて動く、これは、まぎれもなく安野光雅の内部に起きている心の現象である。画家が描こうとする風景と一体化するとき、風景が動き、風景の持つ命の営みが画家の心に働きかける、ということである。

このように、画家も彫刻家も対象を実物に似せて描いたり、彫刻しているのではない。写し取る対象の人物や風景に自分の全エネルギーを注ぎ込んでいる。

こうして創られるイメージは、明らかに作家の手による虚構である。虚構であるがゆえに実物を越えた迫力や真実の味わいを表現することができるということになる。

文学作品もこれと同じであろう。作品を鑑賞する営みは、見る側にも相当の力量が求められる。読者が作品に切り込んで、あるいはその核心部分を「えぐり出す」ことによって、私たちのもつ「全内容」を投入しながら読み深めていく。こうして「読む」行為は、作品を媒介として読者の中に読者固有の虚構を再構築する営みとなる。

■ 「読み」による虚構の探求

作品解釈の実際を考察するために、石田衣良『夕日へ続く道』²⁾を取りあげてみたい。まず、作品全体の流れを俯瞰する段階を「一次読み」とする。つづいて読者の個性を加味しながら読み深めるための「二次読み」をする。最後に、読者の「虚構」を組み込んだ「主体読み」を試みることにする。なお、以下の記述において、作品の内容紹介をしている部分において「」は、原文を引用したものであることを示している。

I (一次読み) の章

1 冬の児童遊園で震える雄吾

主人公の雄吾は中学生。学校の画一的な制度や慣習にうんざりしている。「同じ制服」,「学校指定のカバン」,「同じメニューの給食」など、「こんなことを考えていると、理由もなくへらへらとわらってしまう」。雄吾は考え過ぎるところがある。こうして「眼の前にある世界から意味と色が抜け落ちて、すべてがわけもなくバカらしくなってしまう」。彼は今日も寒い児童遊園のベンチに凍えながら時間を過ごしている。雄吾の父は出版社に勤めている。母は専門学校の講師だ。親の学歴、人望、収入はある。が、家庭は寒々としていた。雄吾は冷ややかな家庭に馴染めない気持ちを抱いている。

【考察】雄吾は、周りの人から自分を隔絶し、冬の季節を孤独の中で過ごしている。周囲のものが無意味であり、バカらしく見えている。そのために学校にも行かない。モノに満たされた生活にも心は寒く、公園のベンチで頑なに自分の意地を通してしている。

2 廃品回収車の呼び声

「不要になったテレビ、冷蔵庫、洗濯機、ステレオなどはありませんか……」廃品回収のスピーカーの音が聞こえている。昼飯時になったので、雄吾はコンビニに行こうとしてベンチを立った。道路に出てみると廃品回収の小型トラックが道を塞いで止まっていた。一人の老人が大型の冷蔵庫をトラックに乗せようとして手こずっている。老人は声をかけた。『兄ちゃん、こづかいやるから押してくれ』。雄吾は黙って冷蔵庫を押し上げた。「雄吾の手のひらは油で湿ったほこりで黒く染まっていた」。

『はい、兄ちゃん、ありがとな』老人がそこに金属の音を立てて、硬貨を落とす。「汚れた手のなかにちいさな五十円玉が二枚光っていた」。そのお金は中華まんに変わった。それから「雄吾は日が暮れるまで、ひとり公園で冬の空気に身体をさらしていた」。「いつか自分の体は寒さで固まって公園の彫刻のようになってしまうのだろう」と思った。

【考察】これまで他人と交渉のなかった雄吾に、未知の人から声がかかる。初めての経験だった。雄吾は老人を手伝って手が汚れた。その手に、老人はお礼のことばと二枚の五十円硬貨をくれた。

珍しい体験だった。雄吾は、そのお金で中華まんを買って食べた。老人のことはすぐに頭から消えた。

3 おにぎりのぬくもり

次の日も公園に行った。廃品回収車はいつも通りにやってきた。老人は、昨日のお礼だと言って握り飯を二つ雄吾にくれた。『そいつはおれがにぎったんだ』。そして「トラックはいつまでか。雄吾はもらったおにぎりで昼食にした」。おにぎりの味は塩辛いのと塩気のないのと不揃いの味だった。それでも「ごはんだけのお昼なのに、なぜこんなに身体のなかがあたたかいんだろう。そのあたたかさは北風が吹き寄せるなか、つぎの三十分消えることはなかった」。

【考察】雄吾は家庭のぬくもりを知らない。不器用な手作りのおにぎりで雄吾の心は温められた。体のぬくもりは続き、雄吾の関心は老人に傾いていった。

4 老人のよびかけ

つぎの日、廃品回収車はやってきた。雄吾は廃品回収のセリフを覚えてしまった。老人は雄吾のところに来て、『ほかに行くところはないんか』と話しかけた。雄吾は黙ってうなずいた。『そうか、なら今日はおれのトラックにのらねえか。あのなかならあったかいし、景色が動くから退屈しない。もちろん廃品回収は手伝ってもらうがな。どうだ、おれも毎日話し相手がなくて、つまらねえんだ』。雄吾は誘われて車に乗った。

【考察】老人は雄吾を誘った。老人のことは、何一つ知らない。それにもかかわらず、雄吾は、老人の誘いに好奇心を抱き、トラックに乗ってみることにした。

5 生活者との出会い

トラックの中で、老人は財布から古いピンボケの写真を出してみせた。亡くなった妻だという。そのとき、雄吾は老人の財布に十万円ずつ重ねて折りたたんだ紙幣を見た。驚く雄吾に気づいた老人は「おれはノミ屋（法定者以外の者が馬券を売る違法行為）をしていた。お金を持っていないと不安なんだ」という。ノミ屋は、「運」のついている時と「不運」な時があるという話もした。『負けないように、あぶない勝負は全部おきたことがあったよ。だがな、そうするとしばらくはいいんだが、もうけのほうもジリ貧になっちゃった。安全に安全にとやったつもりだが、あとでドデカイ発をくらって沈没したしなあ』。

『おれは兄ちゃんがどうしてひとりで公園にいるのかは、わからねえ。だけどな、ときには自分を折るのも大事だぞ。毎日すこしずつ負けておく。そうしておく、最悪の事態はなんとか避けられるもんだ』。老人は一人で話した。

【考察】老人には、死んだ妻が今も心に生きている。雄吾が聞きもしないのに、ギャンブルに賭けた波乱の人生を語った。「自分を折れ」という話、雄吾の心に一滴の雫が落ちて波紋が広がっていく。老人は雄吾の頑なな心を見抜いているかのようだった。

6 老人の世話をする雄吾

「その日は朝から源ジイ（老人）の顔色が悪かった」。お屋敷の前にビデオデッキと小型テレビが出されている。『ついているときはこんなもんだな。あいつを積んで今日は手仕事だ。小遣いやるから、兄ちゃんは映画でも観に行きな』。雄吾は廃品を取りに降りた。そのとき、老人が発作をおこした。老人は救急車で病院に運ばれ一命は取りとめた。脳血栓だった。雄吾は世話をするため病院に通うことになった。

何日かして雄吾の両親が病院にやってきた。父親は、「まだ中学生なので、雄吾の病院通いを週末まで解放してやってもらえまいか」と老人に問う。老人に異論はなかった。雄吾の意見も聞かないで大人の話が進む。雄吾は、「病院に来なくなっても、どうせ学校には行かないのだから」と言った。老人はこのときはじめて、雄吾を叱った。『親御さんにそんな口をきいてはいけない。兄ちゃんは俺の世話をそんなにしなくてもいいんだ』といった。雄吾は、怒って部屋を出た。

雄吾が戻ると老人は言った『なあ兄ちゃん、おれと賭けをしないか。週末までの三日間でおれが便所まで歩いていけたらおれの勝ち。そしたら兄ちゃんはおれの言うことを聞く。おれが負けたら兄ちゃんはおれの車に乗せてやる。これでどうだ』。老人が勝ったら雄吾が中学校に行くという提案だった。

便所までは二十メートルある。三日間のリハビリで、そんなに歩けるはずがない。雄吾は、『わかった』と賭けを受けることにした。

老人は歩く練習を始める。必死で頑張った。途中でくじけそうになりながら、それでも頑張った。週末になってついに老人は便所の前まで手すりにすがって歩いた。勝負がついて「二人は夕日の当たっているベンチに座って話した」。

〔考察〕 思いがけない幸運を目の前にしたとき老人が倒れた。一人暮らしの老人だ。雄吾は病院に通い、老人の世話をした。雄吾の父が、老人の世話を期限を付けようとしたとき、雄吾は無視されていると感じて反論した。そのとき老人は、初めて強い声で雄吾を制した。

後で、老人は賭けを提案した。雄吾が負けたら中学校に行くという条件だった。

老人はリハビリにすさまじい努力を見せた。不可能だと思われたことをやり切った。老人は、自分の努力する姿を雄吾に見せて、何かを教えようとしている。老人は、雄吾のために賭けに勝った。夕日に照らされて二人はさわやかな気分につつまれた。

7 最後の教訓

「夕日を受けながら老人は語った」。『明日から、中学校に行くんだぞ。雄吾の言っていたバカらしさな、あれは大人だってみんな同じなんだ。そのバカらしさに正面から反対するのもバカらしい。みんなどこかで無理して合わせているんだ』。

老人は競馬の必勝法も教えた。『パドック（paddock・競馬前の出場馬を見せる場所）で馬を見て、立派な体の馬を買っちゃいけない。最後に勝つ馬は、細くてふらふらの馬だ』。

〔考察〕 学校へは行かないことにしていた雄吾が、明日から中学校に行く。それは勇気のいることだった。雄吾の考えていた「バカらしさ」を老人が説得した。かつて、老人は「妥協」の大切なことを教えている。今、大切なことは人生の勝負に勝つことである。最後に勝つ馬は、細くてふらふらの馬だという。このことばは、強く雄吾の背中を押した。夕日に照らされるベンチで老人は雄吾を導いた。

8 雄吾の旅立ち

「雄吾は学生ズボンのひざに落ちる最後の夕日を眺めていた。そして、立ち上がると、病室に戻るため車椅子を押してゆっくりと歩き始めた」。

〔考察〕 二人がベンチで話しているとき、「夕日」ということばが二度出てくる。それは、中学校に復帰する雄吾の不安を温かく包んでいる。雄吾を見まもる夕日は穏やかであった。やがて、物語は終わろうとしている。

作品の主題

孤独で意地っ張りであった雄吾は、人生経験の豊かな老人と出会う。雄吾は老人から、人のぬくもりを知った。生きるための心構えも学んだ。観念だけに偏っていた雄吾は、現実に足のついた生活に目覚める。これからは中学校に復帰して、雄吾は仲間と交流しながら生きて行くだらう。夕日は、温かく雄吾の前途を照らしている。

II 〈二次読み〉の章

通常の読書は、〈一次読み〉で終わる。それでも雄吾の変革した姿は読み取れる。この章では、作品をいくつかの場面に絞って、さらに表現を味わってみたい。

1 雄吾の家庭とその両親

雄吾は13歳になって、中学校に行かなくなった。家はあるけれども行先は寒い児童遊園である。学校の授業にはさしたる問題を感じていない。しかし、画一的な規律や共通性を求められる学校の在り方に疑問を持っている。雄吾には、それがバカバカしいものに思えた。両親は自分の仕事に夢中で、食事も出来合いのものが出される。両親は、雄吾の登校拒否に対して理解を示している。雄吾は家族の冷えた雰囲気違和感を覚えていた。

公園は寒い。雄吾は自分が凍えて彫刻になるのではないかと思った。それでも、へらへらと周囲の人々を見下したような眼で見ているのだった。

2 雄吾のドアをノックする音

廃品回収車のスピーカーの音が聞こえる。孤独な雄吾の耳を刺激した。廃品回収車の老人が話しかけてきた。冷蔵庫をトラックに押し上げる「手伝い」を頼んだのである。無意識に雄吾は手を貸した。「手が汚れた」。その対価としてくれた五十円玉が二枚、手のひらで「光っていた」。手を汚す仕事と光る対価、初めての体験である。これは暗に雄吾を動かす誘引となった。これまで、雄吾は観念の世界に閉じこもって生きていた。

その後、廃品回収車の老人は雄吾に、トラックに乗らないかと誘う。その言葉には次のような意味が読み取れる。（*上記、〈一次読み〉「4 老人の呼びかけ」参照のこと）

①「あのなかならあったかい」=公園と違って、車の中には暖かい人間関係がある。これまで雄吾の味わったことのない世界がある。人の温かさについては、先日、老人からももらったおにぎりでも実感している。

②「景色が動くから退屈しない」=老人は車窓の風景を言っている。しかし、老人は自分の生活史を語って見せた。老人の話は、雄吾が社会を覗いてみる「窓」となった。老人のことは、雄吾の迷っていることの核心をついていた。

③「廃品回収は手伝ってもらおう」=勤労への参加を意味する。働くこと、生活することの実感がここから始まる。観念的で、人から強いられる学校とは異質の体験である。

④「毎日話し相手がいなくて、つまらねえ」=孤独に閉じこもらないで、人と交流を図ることの大切さを意味している。世間には色々な人がおり、多様な人生がある。人間関係のもつ充実感と面白さもここから始まる。

老人の誘いのことばには、生活者の持つダイナミックな現実への誘いが含まれていた。トラックに乗ることは、雄吾の体験を膨らませた。雄吾の行動力を引き出し、生きることに目覚めさせた。

3 「夕日」の持っている意味

老人の言葉は、孤独な雄吾に深く吸収された。人と交わることの大切さに目覚め、考え方も広がった。老人から雄吾が叱責を受けたのは初めてのことだ。リハビリにおいて老人は頑張った。「生きる努力」を自ら実践して見せた。老人の入院生活は、雄吾の生き方を脱皮させた。二人は夕日の射しているベンチで語り合った。

①「雄吾は学生ズボンのひざに落ちる最後の夕日を眺めていた」。ここでは単に「ズボン」で足りるところを「学生ズボン」と表現している。雄吾が「中学生」であることを確認し、学校に復帰する気持ちの固まっていることを暗に示したものであろう。

②「最後の夕日」。取りたてて「最後」といった背景には、二つの意味が読める。一つは、雄吾が引きこもりと決別する最後の日である。また、このようにしみじみと二人で過ごす体験は今日で最後だ、という意味も読める。明日から、雄吾は中学生に復帰するのだ。

「立ち上がる」という表現には、雄吾の自己変革の決意が含まれている。「ゆっくりと歩き始めた」には、雄吾の新しい行動への出発を読むことができる。雄吾は、引きこもりの衣服を脱ぎ捨てて、新しい生活に舵を切って「歩き始めた」のである。

作品の主題

〈一次読み〉の主題のところで作品の読みは出来ている。この章では内容を焦点化し、老人の教える教訓とその効果を把握し、雄吾の生き方の変化を追ってみたい。雄吾を支える価値観もとらえたい。人間としてのぬくもり、世間との交流、勤労の喜び、仲間との絆、そして人生における「運」や「ツキ」、などである。雄吾の両親は、これらの生き方や価値観を家庭の教育として取り組んでいなかった。夕日は、雄吾の生き方の修正されていく姿を包み、二人の気持ちと共に、読者の気持ちも包み込む風景となっている。

Ⅲ 〈主体読み〉の章

1 家庭教育の問題

雄吾の両親は、親である前に自分の生活の生き甲斐を求めている。親のエゴは、雄吾を引きこもり誘う原因の一つになっていたことが考えられる。ここに焦点を当てると、この作品は現代の多くの親たちの在り方を見つめる提起と読むことができる。

雄吾の両親は教養豊かな知識人である。雄吾に不自由のない生活をさせ、ものわりの良さも示した。しかし、この養育の姿勢は、家庭のしつけと人間形成にかかわる課題を置き去りにしている。親は自分の関心事にとらわれて、家族のぬくもりを忘れている。雄吾はそこに寂しさを抱いていた。両親の物わりの良さは、我が子の自由を見守るという美名のネグレクト (neglect) となっている。雄吾が、廃品回収の呼び声に出会っていなかったら、どうなっていたか。このことに思いを寄せると、現在の、自己中心でモノにあこがれる幸福追求の風潮が思い起こされる。

2 人生の師との出会い

雄吾が自我に目覚め、人生に向き合うためには、ギャンブルに身を持ち崩した貧しい老人の手引きが必要であった。雄吾はこの老人から暖かい心のぬくもりを受け止める。人生を生きる「知恵」を学ぶ。五十円硬貨二枚ほどの対価は、小さいけれども働くことの意味を示し、汚れた雄吾の手のひらで「光っていた」。このとき雄吾ははじめて「手のひら」を汚した。これは雄吾に、働く価値を教えている。

廃品回収の老人は、数十万円の全財産を肌身離さず持ち歩き、死んだ妻の写真を抱いて生きている。この老人は、一人でありながら家族の絆と共に生きている。生活を支える生活資金を大切に持っている。それが生きている人間の「実像」であった。その生き方のなかに雄吾は生活者の魅力を実感したのである。波乱にとんだ老人の生涯は、どのように生きて行けばよいのかと迷っている雄吾に大きな指針と勇気を与えている。

老人は自分の生き方を抽象的に述べたのではない。「兄ちゃんがどうして学校に行かないのか知らないが」と言いながら、老人は雄吾の内にくすぶっていた疑問に答えている。

「雄吾のいっていたバカらしさな、あれは大人だってみんなおなじように思っているんだ。……兄ちゃんもちょっと大人のふりをしてみろよ」。老人は、くどくどと説教はしない。

雄吾が、久しぶりに中学校へ行く。するとそこには、きつと不安や心配が付きまとう。その支えとして老人は競馬の必勝法を教える。「最後に勝つ馬は、細くてふらふらの馬だ」という。長い人生のレースに勝つためには、見かけの強さだけでは間に合わない、自分の弱さを認めながら、最後に勝てる馬になれば、と論じている。

3 老人の正体

作品の題名、『夕日へ続く道』について考えてみたい。

「夕日へ続く」は、夕日に繋がっていくことを意味している。「夕日」は、やがて西の山に沈んで、一日の仕事を終える。太陽の終焉である。

これまでの経過からして、「夕日へ続く道」を行く主は、志を固めた「雄吾」でなければならない。この作品の主人公は雄吾である。雄吾に人生のすすむべき方向性を教え、生きる知恵を授けているのは、「老人」であった。老人は廃品回収という不安定な仕事で暮らしているけれども、彼が雄吾に取り組んだこ

とは、偉大な指導者の役割であった。

老人は、学校の教師でもないし親でもない。しかし、人生の持っている意味と生きる術を雄吾に話して聞かせている。それだけでなく、自らもリハビリで示したように、体を張って、生きる姿を実行して見せた。このように考えると、老人は人生の先達である。あるいは、抽象的な存在として味わっていくと、知恵の詰まった一冊の得難い書物である、とも考えられる。その正体は、サムシンググレート (something-great) なのである。

もう一つ考えておきたいことがある。それは、老人が自分の生きた姿を雄吾に詳しく語り伝えていることである。老人が雄吾に語った人生は、老人の歴史と知恵から成る「命」である。老人は、自らの死を夕日に擬している。夕日と老人は一体なのである。人間の象徴とも思える人物が、わが子でもない雄吾を導き、親にもできない役割を果たしている。人間としてのぬくもり、人との交流、勤労の喜び、そして人生における「運」や「ツキ」など、人生のもっている秘密にまで踏み込んで教えている。ここに人類を継承する「命の糸」を操る老人の姿を見ることができる。

作品の最後において二人がベンチで話すとき、彼らを静かに夕日が照らしている。夕日はやがて日没を迎え、去っていく。老人はこのことを知っている。命の限界を知ることは悲しいことである。しかし、この事実は命ある者の持つ宿命である。

「夕日へ続く道」には、「夕日」が老人であり、「夕日」に続く道を歩むのは雄吾であることが託されている。老人の命を雄吾が継承していく。ここに命の持つ永遠性を見みることができる。命に目覚めたものは、自分の命を託すべき対象を求める。老人は命を賭けた仕事をした。雄吾の「生きがい」を生み出すために、自分の命の息吹を吹き込んだ。この連鎖のなかに著者、石田衣良の創造した「虚構」がある。人の命は、その人の言葉や仕事を通じて継承される。これがこの作品の「虚構」の持っている「真実」であろう。

4 まとめ

以上のように読んでくると、この作品には、考えてみたい多くのテーマが提示されている。話題性の豊かな作品といえるであろう。たとえば、

- ①働くことと家庭の在り方、幸福の価値観を考えることについて
- ②雄吾の生き方にみられる、思春期をさまよう若者の課題について
- ③老人にみられる、人生を導くサムシンググレートなものについて
- ④老人の姿から、「命」の永遠性を思索することについて

などである。「老人」の哲学を受け入れることができたとき、読者は深遠な「虚構」に目を見張るだろう。著者の石田衣良は、夕日の中で老人の明日を想い、雄吾の前途にその命を託した。

老人と雄吾の「命」の継承のページェント (pageant・野外劇) を映しだす風景は、穏やかで澄明な夕日のなかで語られる場面が最もふさわしかったのである。

■ おわりに

(1) 『夕日に続く道』は、中・高校生の読本として準備された短編小説である。30ページほどの小品であるが、読み方によって著者の創造する虚構が大きく力を発揮し、大人の期待にも応え得るものを持っている。医師も看護師も教師も、対象に向かう眼 (まなこ) は、見えないところに託されている真意を読み取らなければならない。文学作品と向き合うことは、仕組まれている虚構のなかの真実を読み取る場所にある。その力によって、読者の描く「虚構」も大きく膨らんでくる。この点から見ると、中・高校生にとって、『夕日に続く道』は、手ごわい作品といえるであろう。

(2) 本稿では、たとえば「〈二次読み〉の章」の第3節、「夕日の持っている意味」において、〈ことば〉に注目し、深い意味を探っている。これについて、あるいは本稿執筆者の空想や恣意的な解釈に過ぎない、という思いを抱かれる場合があるかもしれない。

文学作品における「読み」の手法として、特に短編に関して、最小単位である〈ことば〉への究明は

欠かせないと考えている。懐中時計のなかの歯車のように、作品を構成する〈ことば〉の歯車は、どんなに小さくても重要な役割を果たしている。少なくとも、文脈に矛盾しない解釈がなされるかぎりにおいて、一つ一つの〈ことば〉の担っている意味を踏み込んで究明することは、必ずしも牽強附会とは言えないであろう。

2016.6.26記

資料

- 1) 佐藤忠良 安野光雅『ねがいは「普通」』（談話）文化出版局・2002年
- 2) 石田衣良『夕日へ続く道』は2004年に刊行された『約束』という短編集のなかの作品の一つ。その作品を全国学校図書館協議会によって集団読書会用テキストとして刊行された。石田衣良が、作品『4TEEN』で四人のティーン・エージャーを描き、直木賞を受けたのは2003年であった。